

猿が恩を返した話

金子彦二郎

一

いまの九州がまだ筑紫とか鎮西と呼ばれてゐた頃の話です。

その筑紫に名高い不知火といふ怪火が、夜なくくに人の魂を驚かすといふ有明の海に添うた或漁村にあつた出来事です。

漁師の妻の刈藻は、あたしかい春の日を、一日家の中にくすぶつてゐてもと思つて、お隣のかみさんの真砂さんを誘つて、藻の香のたゞよつて來る美しい磯邊へ出かけてまゐりました。碧い海の面にはやんわりと春霞が蔽ひ包むやうに揺らめいて、飛び交ふ鷗の群がちやうど夢の國に楽しみ遊んでゐる極樂鳥かなぞのやうに見えました。

二

色の白い優しい心の持主であつた刈藻は荒くれた漁師の妻には過ぎるといはれるほど美しいそして慈善深い人でした。今年二つになる幼児は、母顔と瓜二つといはれる愛くるしい子供でした。この日

も母親の背中できやつ／＼笑ひながら、磯邊へお伴をしました。磯ではいろ／＼な貝類が採り餘るほどありました。刈藻は背中の子供の機嫌のよいのを幸と、波打際から遙かはなれた平な大きな石の上におろして、居合せた子供に見てゐて貰ひました。

さうして身軽になつた刈藻は、眞砂と一緒にあちらこちらと磯邊をあさり歩いて、家苞を精々たつぷりと満たさうとしてゐました。さうかうしてゐるうちに山の根が海に浸つてゐる磯へ出ました。そこに思ひがけぬ珍しい山のお客様の大きな猿が一疋、たゞさへ赤い顔を紅生姜のやうに染めて、キイ／＼キヤ／＼をめいてゐました。

三

小氣味わるくは思つたものゝ、あちこちをきよろ／＼見廻しては異様な叫び聲をたてゝゐる猿の舉動が、何か仔細ありげに思はれたので、二人は目くばせして、そろ／＼と近づいていきました。併し猿は少しも其の場から離れようとしなればかりか、どうやら救ひでも求めてゐるらしいをぶりさへ見えますので、二人は思ひきつて近寄つて見ると、さてこそ人が近づいて來ても其の場を去らないも道理、大きな／＼溝貝に右手の先を咬へられて、抜くには抜かれず、痛さは痛し、どうにもかうにも動きがつかかず、かうして啼き叫んでゐたのであります。察する所、其の貝が口を開いてゐたのを取つて食べようとて手をさし入れると、急に貝が蓋を閉ちて金縛りにしたものと思はれます。

この猿の絶體絶命な實狀を見届けると、男勝りの元氣者の眞砂は雀躍りして喜んで、「思ひもかけぬよい獲物よ、この大猿を討取つて、家路のお土産にしやう。」と、傍にあり合ふ大きな石を取つてあはや投げつけようと身構へました。すると頓驚な聲を立て、

「まあ、お待ちなさいよ、かはいそくに……」

と言ひながら、それを押しとどめた者があります。それは別人でない刈藻でありました。

刈藻は何だか自分の子供が棒打擲でもされてゐるかのやうに感じて、とてもそれを黙つて視てゐるわけにはいかなかつたのです。それでももう涙ぐんで、

「もし眞砂さん、そんな手荒い事をなさるもんぢやありませんよ。」

とおしなだめて、投げうたうとしてゐる石をひつたくりました。

眞砂はせゝら笑つて、

「あなたもあんまりお氣弱な、こんな大した獲物を見つけ出しながら、見すゝけ取り逃がしてたまるものですか。一打ちに打殺して。家へ持歸つて焼いて食べようものを……」

といつて、中々刈藻の助命を聞き入れようとしなかつたのですが、刈藻がおろ／＼聲になつて一生懸命に説き諫めたので、やう／＼思ひ留らせることが出来ました。やつと安心した刈藻は、貝を岩から

引剝がすために持ち合せてゐた木片で、貝の口をこち開けてやりますと、やつとのことで猿は綱體絶命な金縛りの責苦から解き放たれてもう有頂天になつてキヤ／＼わめきながら二三間向ふへ走り退きました。さうしてこちらを振返つて、泣くのか笑ふのかまるで見當もつかない妙竹林な表情をしてお辭儀をペコ／＼致しました。刈藻は快げに打ちうなづきながら、言葉のわかる人間に物言ふやうに、「これお猿よ、お前はもうすでに殺されようとしてゐたのを、やつとの事で命乞ひをしてやつた私の心を忘れてはなりませんよ。」

と言ひきかせますよと、目をバチクリさせて聞いてゐた猿は、如何にもその意味がわかつたらしい顔をして、やをら身を翻へして自分の仲間のおる山の方へ走つていくやうでした。

五

さて慈悲深い刈藻は貝に對しても親切をつくすことを忘れませんでした。猿を助けてやつた後で、今度はその大きな溝貝をも波打際の沙を掘つて埋めてやり、もう二度と、お猿なんかに取られるやうな淺瀬へ出しやばつてゐるんぢやありませんよ。」と言ひきかせてゐました。

二度この時です、遙か後方で、火のついたやうに泣き出した赤ん坊の泣聲に交つて、

「お母さん、たまた大變……」

「あれ、猿が赤ちやんを……さらつて……」

などゝ口々にわめき立てる聲がしました。

この只ならぬ叫び聲で、子供を後に残して來た刈藻は、全身の血管が一時に硬化し、心臟が咽唯喉もとまでドキンと突きあがるやうに感じました。

で、「どうぞ、不幸な事件が持上つてゐませんやうに……」と心中に念じながら、さつと振返つてうろたへ騒ぐ子供達の方を見やると、

「あれ！」

といつたまゝ屍もちをついてしまひました。

あゝ「どうぞ不幸な事件がおこりませんやうに！」と念じた祈りは滅茶々に踏みにじられてゐました。

そこには今——たつた今、眞砂の氣に逆つてまで救命を願つてやつた其の猿が——感謝の心を一ぱいにして山の方へ逃げ去つたことゝばかり思ひ込んでゐたその猿が、天にも地にもたつた一人のかはいゝ我が兒を、引きさらつて木の深い山の方へ逃げてゆく狂暴な、二目とは見られぬ悲劇が演じられてゐるではありませんか。

この時ばかりは流石佛のやうな柔和な慈悲心そのものゝやうな刈藻も、

「あの恩知らずの山猿奴が……」

と思はず口走らすにはゐられませんでした。すると眞砂は冷い笑を刈藻の顔にちらりと投げかけた、「だから、言はないことぢやありませんよ、面に毛のある物で恩など感じる物があるのですか。あの時あなたが出しやばりさへしなれば、私も大儲けが出来たし、あなたもいとしい兒をさらはれるやうなこともなかつたらうに、飛んでもない馬鹿を見たものだ……」

と怨み言を言つた。が併し、この急迫した場合に今更めいた愚痴を言つてゐても始まらないと、思ひ返し、そこは氣丈者だけあつて、

「さ、さ、早く／＼、姿を見失つては一大事……」

と、まだ餘りの悲しさに地上にべたりと坐つたきりの刈藻をせき立てて、山猿の後を追ひかけました

六

樹の間を縫うて行く赤子の泣聲を慕ひながら、息せききつて駈け登る刈藻の口からは、まだ諦められないと見えて——もとより諦められるものでないか——「憎らしい山猿奴……自分の命を助けて貰つたことを有難いとも思はず……人もあらうに、折もあらうに、私の……私のいとし兒をさらつていくとは……あゝ氣の知れない山猿め……あゝ／＼、いとし兒の命さへ無事で取返せたら……南無……阿彌陀……佛……」などいふ言葉がとぎれ／＼に呻くやうに吐き出されました。

併し猿はさうした泣き言などには一向無關心に、どん／＼山深く逃げ込んで往つて、やがてとある

大きな木の上へ、赤ん坊を小脇に抱へたまゝすると攀ぢ上つてしまひました。

七

やつと其の木の根もとに辿りついて二人は、心に身に添はず、「今喰はれるか」と、おどくしで見上げてゐましたが、眞砂はふと氣がついて、「もうかうして居場所を突きとめたからには、男の手で取り返して貰ふより外に仕方がない。これから私は一走りして、あなたのお宅の方に告げて來ます。」といつて一散に元來た道を駆け戻りました。

後には母親の刈藻がたゞ一人、狙の上に載せられた鯉の運命を見守つてゐるやうな身も世もない破裂しさうな心臓をそつと押へつけてゐるやうな心持で、涙で曇る眼を見はつてゐます。

八

三丈ほどもある大木の上に、いよ／＼自分の落ちつき場所を求め得た件の猿は、右手を伸して側の大きな枝をぐつと引き撓めると、今度は左の小脇に抱へ込んでゐる赤ん坊をぎゅーとしめつけるやうにします。もう泣いて泣いて泣き疲れてゐる赤ん坊は、この不意の壓迫に、また「きやあ！」と泣き出しました。

「今こそ……山猿の餌食に……」と、母親は思はず仰いでゐた顔をふせて、眼を蔽うてしまひました。泣聲がまだ續いてゐる所を見ると、まだ生命はあるらしい。

と、この時、さあーつと空が翳つて來たやうに感じたので、思はず又空を見上げると、見るからに肝が冷えるやうな大鷲が一羽、赤兒の泣聲をきいて「よきゑさがある」とでも思つたものか、猿の方へ羽搏き恐ろしく翔け寄つて來ます。

母親はまた化石するやうな恐怖を身に感じて面を俯せました。さうして心中に「山猿だけでも助からないと思つてゐるのに、おまけにあんな大鷲にでも狙はれては、もう頼の綱も切れた。ことによつたらこの私までも大鷲の餌食になるかも知れない。もう仕事がない！」と、觀念冥目して、掌を合せて念佛を唱へました。

九

かうした諦めが母親刈藻の胸を横ぎつた次の一刹那です。目を閉ぢて俯いてゐる母親の眼前三尺の處へ、恐しい地響とともに、何か大きな物體が墜落して來ました。

「あつー！」

と驚きの聲をあげた母親は、てつきりそれが自分のかはいい赤ん坊だと思つてゐました。だがその驚きと同時に覺えず打開いた眼の窓に映つたものは、意外にも、猛惡な大鷲の血まぶれな骸でありました。

大鷲の死骸に度膽をぬかれて見入つてゐた母親は、やがて又さつきの諦めを忘れて樹の上

の我が兒は如何にと見上げました。と、猿は快ささうに目をバリクリさせてゐて、子供を取喰はうとする風も見えませんが、それで母親がやゝ安心して見つめてゐると、猿はまたさつきの枝を撓め寄せて、子供を泣かせます。

「今度といふ今度、取喰はれるんだ。」

と思つた母親は、併し少し大膽になつたと見え、やはり目をはなたずに猿の舉動を見まもつてゐましたすると又泣聲をきいて飛んで來た物がありません。それも前の劣らないほどの大鷲でありました。いよ／＼鋭い曲つた嘴が、強い翼が猿に飛びつかうとする刹那、満月のやうに撓めしぼられてゐた例の枝がぶうんと唸りを生じて猿の右手から放たれました。と同時に又地響させて大鷲が落ちて來ます。

かうして一伍一什をじつと見つめてゐた母親刈藻には、やつと猿のすることに合點が이었습니다。

「おゝ／＼、猿は私の赤兒を取つて食べるのではなかつた。私に思返しをしようと思つて、鷲を打殺して禮物にする積りなのだ。」

かう分つて來ると、母親の顔には俄かに生々と血の氣が戻つてまゐりました。さうして又人間に物言ふやうに「おゝ、猿よ、お前の志の程は十分分つた。もう／＼いいから、赤兒を返しておくれよ。」と言ひましたが、猿は又も同じやうな手段で、とう／＼大鷲を五羽まで弾き殺して、さておもむろに木を傳つて下りて來て、赤兒をそつと其の木の根もとに置いて、急いで木の梢にかけ登り、腕を揉ん

だり背中を掻いたりしてゐました。

一〇

さて母親がもうてつきり殺されたと思つた我が兒に再會の出來た歡喜に浸つて、嬉し泣きに泣きながら乳をふくませてゐる時、眞砂の注進を聞いて取るものも取りあへず駆けつけた夫の漁師が來合せました。父の喜び、母の喜び、子の喜び、この三つの喜びが巴をなしてくるめきをどつてゐるのを見下してゐた彼の山猿は、いつしか梢傳ひに姿を隠してゐました。

夫が安堵の胸を撫でおろした頃、妻の刈藻がたつた今しがた見せつけられた怖い光景について物語ると、夫も非常に不思議なことだと感歎し、五羽の大鷲の羽を抜き取つて家に歸り、その尾や羽を賣つて少なからぬお金を儲けました。(一五、一、一九)